2017/10/4

新約聖書とその思想
―パウロ研究（５）―

S. Ashina

オリエンテーション

＜本演習の意図と目的＞

新約聖書は、キリスト教思想の基盤であり、キリスト教思想研究を志す者には、聖書原典を読む能 力（語学・聖書学・聖書神学など）が求められる。本演習ではギリシャ語原典の講読を通して現代 聖書学の基礎の習得を目指す。

本年度は、昨年度に続き、多岐にわたる新約聖書の思想の内から、パウロのローマの信徒への手紙の第４章を講読し、パウロのテキストに即しつつその思想の内実へと迫ることを試みたい。本演習では、各種の辞書の使用法から、聖書注解書の扱い方といった、聖書テキストを読解する上で必要となる基礎的作業の習熟を目指す。受講者には、パウロの思想の理解を深めるために、Cranfield の注解書（ICC）などの注解書の参照が求められる。また、David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Pau*l, second edition, T&T Clark, 2006. の講読を並行して行う予定である。

＜テキスト・文献＞

１．Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgessellschaft, 28.Aufl, 2012.
２．Gerhard Kittel und Gerhard Frierich, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Kohlhammer, 1933-1973.
３．C.E.B. Cranfield, *The Epistle to the Romans*（ICC）, T & T Clark, 1975.
４．Cristina Grenholm, *Romans Interpreted. A Comparative Analysis of the Commentaries of Barth, Nygren, Cranfield and Wilckens on Paul 's Epistle to the Romans*, Almqvist & Wirsell International, 1990.
５．Ｇ・ボルンカム『パウロ　その生涯と使信』新教出版社（原著1969年）。
６．Ｅ・ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社（原著1969年）。
７．Ｅ・Ｐ・サンダース『パウロ』教文館（原著1991年）。
８．荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972年。
９．佐竹明『使徒パウロ　伝道にかけた生涯　新版』新教出版社、2008年。
10．青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡　イエス・パウロ・その後』新教出版社、2013 年。
11．Jürgen Roloff, *Neues Testament*, Neukirchener,1999.
12．Craig L. Blomberg, *A Handbook of New Testament Exegesis*, Baker Academic, 2010.
13．Teodore W. Jennings, Jr., *Outlaw Justice. The Messianic Politics of Paul*, Stanford University Press, 2013.
14．Daniel Patte and Cristina Grenholm(eds.), *Modern Interpretations of Romans*, T & T Clark, 2013.
15. Chrys C. Caragounis, *The Development of Greek and the New Testament. Morphology, Syntax, Phonology, and Textual Transmission*, Baker Academic, 2006.
16．浅野淳博ほか『新約聖書解釈の手引き』日本キリスト教団出版局、2016 年。
17．松木治三郎『ローマ人への手紙　翻訳と解釈』日本キリスト教団出版局、1966 年。
18．原口尚彰『ローマの信徒への手紙　上巻』新教出版社、2016 年。

＜演習予定＞

・10/4：オリエンテーション＋導入
・10/11：ローマ書の１章～３章を振り返って＋分担確定（テキストの配布）

・10/18, 25, 11/1, 8, 15, 22, 29,12/6, 13, 20, 27, 1/11, 18：演習
基本箇所の読解＋注解書／研究文献→分担し発表する。

パウロと初期キリスト教　（2017 年度前期・特殊講義２から）

（1）パウロ――迫害者から使徒へ

1．パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市
様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。
30 頃:エルサレム教会の成立　66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害
66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

2．迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）
↓
地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒と存在
急速な拡大（点から点へ）

3．エルサレム教会とユダヤ的なキリスト教（あるいはユダヤ教イエス派）
律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

（2）聖書学的観点から

4．多様な弟子集団からパウロ的キリスト教への展開は、歴史的状況に規定されたパウロ以降に起こった事態である。
・ユダヤ的キリスト教、使徒会議(48/49)、ユダヤ戦争(66-70)
・ユダヤ戦争以降の状況が初期キリスト教とユダヤ教の分離・対立を引き起こした。
→　キリスト教のユダヤ教からの離脱
・パウロの異邦人伝道路線の線上における初期キリスト教

5．ペンテコステの意義：ルカ的な「救済史の神学」の内部に位置する（？）
言語の多様性　→　民族の多様性とキリストにおける統一＝世界宗教

（3）パウロ伝承と歴史的パウロ

6．資料
1)使徒言行録：90 年代
2)パウロ書簡:第一テサロニケ、ガラテヤ、フィリピ、フィレモン、第一コリント、第二コリント、ローマ
3)二次的パウロ：第二テサロニケ、コロサイ、エフェソ、牧会書簡（第一第二テモテ、テトス）

7．パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市
様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。
30 頃:エルサレム教会の成立　66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害
66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

8．迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）
↓
地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒と存在
急速な拡大（点から点へ）

9．小アジア南東隅付近の町タルソ出身のユダヤ人。イエスと同じ頃の誕生。没年は 62 あるいは 63 年という説。主たる言語はコイネー・ギリシャ語、都会人、中産階級に属する教育を受ける。天幕作りの職（使徒言行録 18.3）
前半生はパリサイ派（復活を信じる）。
パリサイ派のガマリエル一世に師事（使徒言行録 22.3）は伝説・推測。
イエスの弟子集団を迫害。しかし、詳細は不明。

回心は 33 歳頃→異邦人を回心させるという特別な使命の自覚
10. 論争：エルサレム教会とユダヤ的なキリスト教（あるいはユダヤ教イエス派）
律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

（4）パウロの意義と新しいパウロ論

パウロ的キリスト教が現代に至るキリスト教の基盤となる。
11. 普遍宗教・世界宗教キリスト教への道
民族性を越えて世界へ、市民社会のキリスト教への道？
12. 西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ
パウロへの反発・パウロ批判
体制的イデオロギーの代表
↓
新しいパウロ解釈：1980 年代以降
体制派パウロから戦うパウロへ
政治哲学におけるパウロへの注目
「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）
「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジェク『操り人形と小人』青土社、195）
「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ 3:28）
13. パウロ的教会（エクレシア）とは何か。

（6）パウロと政治哲学

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther...

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith.（Horsley, 1）

in the aftermath of the Holocaust

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamantal "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism.（2）

14. ローマ帝国のイデオロギー

Focus on the Roman imperial order as the context of Paul's mission, however, is leading to another recognition. Instead of being opposed to Judaism, Paul's gospel of Christ was opposed to the Roman Empire.

That Paul's gospel opposed the Roman imperial order, not Judaim, becomes increasingly evident the more we reexamine principal facets and key terms of his gospel,as evident in virtually all his letters. In 1 Thessalonians, from beginning to end, God's kingdom and the true Lord, Jesus Christ, are opposed to the Roman Empire and its ideology of "peace and security, " which stand under the imminent destruction of God's judgement（1:10; 2:12; 3:13; 4:14-18; 5:1-11, 23）. In 1Corinthians, from Paul's first long argument to his ecstatic "explanation" of the ressurrection, Paul opposes his gospel to the Roman rulers and the imperial order.

2:6-8, 1:26-27; 4:8-10, 6:1-4; 7:31, 15:24, 2:9, 3:19-21（3-4）

Moreover, just as Paul's gospel of Christ as Lord evidently stood opposed to the Roman imperial order, so the local representatives of that imperial order evidently opposed Paul and his assemblies.（4）

Recent constructions of "the social world of the apostle Paul" have perpetuated the standard view that the *pax Romana* provided a benign context for the Pauline mission and rise of "Christianity."（6）

Political stability may have prevailed in the cities where Paul carried out his own distinctive mission, but that stability imposed by the Roman imperial order surely meant insecurity for many if not most urban people.（9）

15．パウロとユートピア

被造物全体の救済、ローマ帝国の環境破壊のイデオロギーに抗して

Robert Jewett, The Corruption and Redemption of Creation. Reading Rom 8:18-23 within the Imperial Context.（25-46）

Jacob Taubes　Paul's "political theology" as "a political polemic against the Caesars,"（25）

＜参考文献＞

１．佐藤研『聖書時代史　新約篇』岩波書店。
２．青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡　ｲｴｽ･ﾊﾟｳﾛ･その後』新教出版社、2013 年。
３．土戸清『初期キリスト教とユダヤ教――ヨハネ福音書研究の諸課題』教文館。
４．土屋博『教典になった宗教』北海道大学図書刊行会。
５．Ｇ・タイセン『新約聖書――歴史・文学・宗教』教文館。
６．Ｇ・ボルンカム『パウロ　その生涯と使信』新教出版社（原著 1969 年）。
７．Ｅ・ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社（原著 1969 年）。
８．Ｅ・Ｐ・サンダース『パウロ』教文館（原著 1991 年）。
９．荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972 年。
10．佐竹明『使徒パウロ　伝道にかけた生涯　新版』新教出版社、2008 年。
11．清水哲郎『パウロの言語哲学』岩波書店。
12．ヤーコプ・タウベス『パウロの政治哲学』岩波書店。
13．アラン・バディユ『聖パウロ――普遍主義の基礎』河出書房新社。
14．ジョルジョ・アガンベン『残りの時――パウロ講義』岩波書店。
15．宮田光雄『国家と宗教』岩波書店。
16．Richard A. Horsley（ed.）, *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.
17．David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*（Third Edition）, T & T Clark, 2015（2004）.
18．Dieter Georgi, *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress Press, 2009.

＜栗林輝夫「「帝国論」におけるイエスとパウロ」＞

西原廉太、大宮有博編『栗林輝夫セレクション１　日本で神学する』新教出版社、2017年。（コピー）